

## 紹介

ケヴィン・グリーン著

(本村俊二監修 池口守・井上秀太郎訳)

### 『ローマ経済の考古学』

本書は Greene, K. *The Archaeology of the Roman Economy* (London, 1986) の全訳である。邦語の翻訳が出版されたのは一九九九年であり、両者の間には十五年近くの開きがあることに気づかれよう。その意味で本書の内容には必ずしもアップ・トゥ・デイトでない部分があるかも知れないが、著者の本来の目的である考古学と歴史学の提携は、この十五年の間にどれほど進んだであろうか。そのことを鑑みる時、本書の刊行には今もって大きな意味があると思われるのである。さて、著者 K・グリーンはニューカッスル大学 (イギリス) の考古学講師であり、本書は以下のような内容となっている。

第一章「序」では、古代ローマの経済の研究方法として、歴史学と考古学の協力が提唱されている。考古学では実地調査・発

掘・遺跡および遺物の比較といった研究が行われているが、著者によると、それらの調査の結果は、関連諸民族に関する文字史料の研究成果と十分に結び付けられねばならない。そうすることで研究の幅の広がりが期待できるのだが、同時に著者は考古学の限界を指摘することも忘れていない。すなわち、現存する遺跡・遺物のすべては偶然に残存したもの過ぎず、必ずしも代表的な標本ではないのだということ、したがって特定の研究成果を安易に一般化するのには危険だということである。以上の点を踏まえた上で、著者は従来のローマ経済の研究史を概観する。特に言及されたのは M・I・フィンリーと A・M・ジョーンズおよび K・ホプキンズである。いうまでもなく、古代の社会・経済に近代の特徴を認めたと M・ロストフツェフに反論し、古代経済の支配的形態として農業を指摘したのがフィンリーとジョーンズであった。彼らの議論を継承しつつ修正したホプキンズの学説に、経済史研究上の考古学の役割の枠組を与えるものとして、著者は特に注目している。

第二章「ローマ帝国の輸送」以下でいよいよ具体的な研究が展開されてゆくが、著

者は最初に、経済活動に不可欠な輸送・交通手段を取り上げている。まず考えられるのは水上輸送であり、造船技術やその背景、船体の分類と規模、航海技術と所要時間、交易圏の問題などが分析されている。対する陸上輸送で考察されたのは、道路の建築や整備、乗り物と牽引する動物、輸送費用などである。結論として著者は、ローマ帝国時代の輸送・交通手段の優越性を認め、その輸送システムが一・二世紀を頂点として次第に効率を低下させ始めたことを見る。この優越性への認識が、ローマの経済活動に対する近年の否定的評価に修正を加える際、必要不可欠な前提条件になると述べて、著者はこの章を終えている。

経済を語る上で欠かせないのが貨幣である。第三章「ローマ帝国の貨幣製造と貨幣」ではローマ社会における貨幣の諸側面が分析される。その議論は製造に始まり、貨幣制度や銀行、そしてインフレといった経済現象にまで及ぶが、それらから導かれる結論として、著者は以下のように締めくくる。すなわちローマの製造から受ける現代的な印象は誤りであるということ (当時の社会には、紙幣も正確な会計のための数

字体系も存在していなかった、それでもローマ経済における貨幣制度の普及度は印象的であり、それは三世紀の経済混乱期にあつてさえ顕著であつたこと、などである。

ローマ社会の経済活動として農業のもつた重要性を否定する研究者はいないだろう。第四章「ローマ帝国における農業」では、

その考察のために文字史料の他、あらゆる考古学史料が駆使されている。例えば美術作品・動植物の化石などであり、さらには土壌学や植物学そして環境考古学が援用されている。それによつて農作物から当時の気候までが分析されてゆくのだが、農業を理解する上で重要であるとして、著者はさらに農村部での定住形態とその進行度を議論する。この考察を継承し展開したのが第五章「ローマ時代の定住地および農業の地域的調査」であつて、ここでは帝国各地の農村が個別に研究されている。

第六章「ローマ帝国における金属、石材、陶器」に入ると、話題は資源や技術に移る。金属工業の技術が飛躍的に発展したわけではないにせよ、ローマ時代には金属資源の開発と生産が著しく盛んになつた。又冶金の技術も高水準にあつたようだ。他の資源

としては石材が重用された。陶器に関する分野では、重要な言及が文字史料にあまり見られないため、考古学的な調査が威力を発揮することとなる。ローマ経済を理解する上で重要な情報、その幅を拡大するため考古学が果たし得る役割を、ここで著者は改めて強調している。

第七章「結論」では、考古学と各章のテーマとの関係が簡潔に要約されている。その上で著者は、フィンリーなどの「ミニマリスト」的な研究法を批判し、古代世界における経済の進歩や進化を否定する。著者によれば、帝政期のローマ経済は「ギリシア時代やローマ共和制期に既に存在していたものが増大しただけ」であるという。最後にくり返されるのは本書の主旨であり、それは歴史学と考古学の提携を強く主張している。その結果として解釈上の問題なども生じてくるが、「それはわれわれを落胆させるものではなく、むしろ興奮させるもの」であると述べて、著者は本書を結んでいる。

一九八六年に出版された原著は大きな反響を呼び、これまでに数多くの書評が寄せ

られてきた。そのなかのひとつに、K・D・ホワイトの書評があるが、この評者は、「考古学の成果を利用しようとする際、歴史家の負う課題は容易ならざるものであり」、そのような中で、グリーンンの著書は「考古学」と歴史学の接近を旨とした「イギリ

ス初の試み」であると述べる。「いくつか不十分な点はあるにしても、本書は不必要な専門用語を排しており、幅広い読者層を得るに値する」「専門家においては、古典学者と考古学者の相互理解を促進する一助となるであろう」というのが、評者ホワイトの原著に対する評価である。これは本書のあとがきで監修者の本村氏が述べていることとほぼ同じであろう。「過去を再現する」といふ目的において、……歴史学と考古学は本来対立するものではない。そもそもそのところ相互の成果をよく吟味しながら手をたずさえて進むべきものである」。そう

いった課題にひとつのモデルを提示したのが、まさしく本書であるといえるだろう。ちなみに以前、紹介者は、環境の歴史に関する文献をいくつか読んだことがある。その際、直接「モノ」が関係してくる研究分野において、文献資料にのみ依存する方

法の限界を痛感したが、その紹介者にとっても、本書はひとつの方向性を示す貴重な一冊であった。

(A5判 四三二頁 一九九九年六月)

平凡社 五二〇〇円)

(布施谷友美 京都大学大学院文学研究科修士課程)

### 『史林』投稿規定

◇資格 本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さ

○論説 四〇〇字詰八〇枚以内

○研究ノート 四〇〇字詰五〇枚以内

○研究動向 四〇〇字詰五〇枚以内

○書評 四〇〇字詰二〇枚以内

○紹介 四〇〇字詰三枚程度

◇論説には四〇〇字以内の「要約」と「欧文要約」を添付のこと。

◇研究ノート・研究動向・書評には、「欧文タイトル」のみ添付のこと。

◇注は各章末に入れること。

◇ワープロ原稿の場合には、フロッピー(MS-DOS)のテキストファイル、機種を明記する)を添付のこと。

送り先 史林編集委員会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

### 御注意

図表、あるいは特殊活字を掲載する場合には、その印刷経費の一部を負担していただくことがあります。

### 『史林』投稿規定補足

#### ワープロデータ支給要領

※ワープロデータを支給していただく場合、左記の保存内容をお願いします。

・拡張子が「.TXT」となるテキストデータで保存して下さい。また、本文と注を分けて別のファイルとして保存していただいた方が作業が早くなります。

#### 例 HONBUN.TXT

・右記の保存方法が不可能な場合、ワープロ専用機の保存方法で結構ですが、機種名をラベルなどにご記載下さい。Mac・パソコン(Windows)使用の場合、機種名に加えてソフト名の表記もお願いします。

・基本的に、投稿論文のデータのみを保存して下さい。 unnecessary データがある場合は明瞭にして下さい(ラベルに表記など)。

・フロッピーディスクは、3・5インチ2DD(640KBモノ)か、3・5インチ2HD(1・2MB)をお願いします。フォーマット形式は明記して下さい。